
イチジクと栗

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチジクと栗

【Nコード】

N0009L

【作者名】

緋色

【あらすじ】

二人は探していた

取り戻すことの出来ない記憶のかけらを

手に入ると信じながらも、同時にありはしない事も理解している

それでも、二人は旅をする

その道で出会う人々に二人は何を思うのだろう

今、ほろ苦い青春が始まる

嵐の憂鬱（前書き）

初めまして、緋色です

初投稿でとにかく見てもらった方感謝です

文章がおかしければご指摘を

では、どうぞ

嵐の憂鬱

人の気配もない岸壁の岸辺に、二人の少年少女が背中を預けながら、座り込んでいた。嵐のせいなのか、風は吹き荒れ、波は強く打ち返し、彼らの顔は水しぶきをあびていた。

「なあ……」

「ん？どした」

重い瞼を開けた二人は、ぼんやりと荒れる海を眺めながらぼそりと呟く。そう、まさにぽつりと

「きのう、何してたっけ」

「……団子食べた」

「ああ。あれはウマかったなあ」

彼らは、ほっと微笑む。

「あつちまで、足とどくかなあ」

「頑張ればいけると思うよ」

二人が座っている岩は、岸沿いから少し離れた孤島だった。面積もちょうど二人分しかなく、岸辺まで足がとどくどころか、二人の身長では飛びついても無理だろう。

「そっぴや、なんでここにいるんだっけ」

「……わかんない」

そしてなぜ、自分達がここにいいのか、どうやって辿り着いたのか、昨日何があったのか、すっかり忘れていた。しかし、二人はなんにも頼るものが無いなかで、ずいぶんとまた落ち着いていたのだ。着物もすっかり濡れ、風が彼らをより冷やしているというのに。そんななか、少年は海の地平線を眺めながら、いまだ叶わない夢を思い返す。

「親父……どこにいるのかな」

「……」

「母さん、墓参りに来なくて怒ってるかな」

「・・・うん」

波がさらに荒れ、風も強さを増してくるのとは対称に、彼らの表情には、波風一つたつてはいない。彼らの心情は、限りなく平穩、ならぬ冷徹。もはや自分達がどうなるかと、何一つ気にする事はない。

ただ、たった一つの夢を、胸に思い描けばいい。今はなき、はるか
な過去に手をのばしながら

「あつ！おい、まじかよ」

ぼつんと座る二人を、隠れた向こうの岸沿いから来た、一人の男が見つける。男は、信じられない様子で、足場の悪い岩場を進み、二人に近づぐ。

「おい、大丈夫かあ！」

二人は声を掛けられ、ようやく気がついたのか、男のいる方向に振り向く。それと同時に、男が来た岸沿いからもう一人、若い青年が来ていた。

「まさか次郎の言った通り・・・。親父さん！」

「お、健助か。待ってると言ったる」

「でも・・・。本当だったら、親父さん一人じゃ危険だよ」

「馬鹿、俺がそんなヘマするか」

「もう。おい！二人とも無事か！？」

しばらく待つも、二人はなんの返事もなかった。しかし、視線は依然こちらをむいている。

「どうしたんだ？」

「ったく、やべえな。嵐、もうすぐ来ちまう」

親父さんは、空を見上げて呟いた。

「飛びつくにはちょっと遠いぞ。風は強いし、波も高くなってきた、
つておい、健助！」

親父さんが健助の方を向くと、彼は少ない足場のなか、精一杯助走をつけようとしていた。慌てた親父さんは、健助を止めようと前に塞がる。

「親父さん……」

「馬鹿か！いくらお前でも、届かねえ。海に落ちたら、どっかに流されるぞ」

「でもっ、……助けなきゃ。今行かなきゃ」

「駄目だ！お前を死なせる訳にはいかねえ。せめて縄なんか持つてくるからよ」

「親父さん」

健助は俯いていたが、少しの躊躇いを吐くように息を吐き、親父さんの言葉を無視して、身を構えた。

またその時、新たに数人の男たちが手に梯子や縄を持って様子を見に来ようと姿を現していた。だが、健助はそれに見ることなく、

「お前！まっ……」

「ごめん、どいて！」

止める親父さんを振り切り、二人の元へと飛びあがる。しかし

「あっ」

「健助！！」

島の小さなスペースに飛び乗ることは出来ず、水しぶきをあげ溺れる健助だが、辛うじて端の飛び出た岩に手を引っ掛けることが出来た。そして健助は島に足をひっかけ、押し込むように乗り上げたのだった。その様子をぼんやり見ていた少年は、彼の無謀な行動に目を見開き驚いている。

「……」

「へ、へへ。大丈夫か？」

「……」

健助がほっと一息ついた時、背後から怒号が飛び出すし、そこにいたのは、健助の父だった。

「この馬鹿息子！！」

「いつ、と、父ちゃん？」

「お前はそこからどうやって助けるつもりだ！抱えて戻るつもりか」

「あつ……」

「この馬鹿、親不孝者っ！」

「うう……」

「ま、まあまあ」

あまりの言われように、周囲の者が父をなだめている一方、健助はポカんと、呆然としていた。

「ほんと、あいつは後先考えねえで行動しやがる」

「いやいや、馬鹿正直なんですよ。悪いことじゃないです。」

「しっかし、ここからどうやって……」

「方法はある！」

健助の父は、仁王立ちで宣言した。

「そ、それは一体、」

「ここは漁師の町。漁師なら引つ張って、釣りあげる！あれは獲物だ！」

「……」

「……」

「……バカ親父い！」

「却下っ！」

「何っ!？」

一同、さすが親子だと思い知った瞬間だった。結局、男たちが持っていた梯子が届くと分かったので、岸と島の間には橋を掛け、念のため縄で二人を縛りつけながら渡り、助かったのだった。

「じゃあ俺も、つて、梯子ない！」

「お前、罰としてそこに残れ」

「あ、嵐きてんだぞ。死ぬぞっ？」

「縄で体でも縛っとけ。じゃあな」

「……バカ親父い！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009/>

イチジクと栗

2010年10月9日21時05分発行